

## セルジューク朝と遊牧部族

——アラブ遊牧部族のマズヤド家

後藤 敦子

はじめに

中央アジアから移住しイスラームに改宗したトルコ系遊牧部族（トルクマーン）を祖とするセルジューク朝（一〇三八—一九四年）の支配システムは、セルジューク家の血筋をひくスルタンが政治権力を掌握する軍人支配体制であった。セルジューク朝の軍隊はスルタンや王族の親衛隊、有力アミールが指揮する正規軍と、臨時に招集される傭兵による非正規軍から成り立ち、非正規軍はアラブ系、クルド系、イスラームに改宗したトルコ系の遊牧諸部族や一般人が一時的に組織された軍団であった。正規軍は主にトルコ系奴隸軍人（ゲラーム）の出身のアミール（軍司令官）に統率された軍団で、アミールは軍事奉仕の俸給としてイクター（徴税権を伴う土地の授与）を得ていた。しかし、さらに興味深いのはアラブ系の在地勢力の活躍である。一〇—一二世紀はトルコ系軍人の進出をもってイスラーム史のメルクマールとされることが多く、それ以外の勢力に目が向けられることは少なかった。そこで本稿では、イラク在地勢力の中心であるマズヤド Mazyad 家を取り上げ、セルジューク朝時代の政治情勢の変化とともにマズヤド家の軍事的役割がどのように変容して

いったかを検討する。紙幅の関係上、セルジューク朝軍人支配システム内において、マズヤド家の軍事的役割が明確に示される第三代スルタン＝マリク・シャー Malik Shah (在位一〇七二—一九二) 以後に焦点をあてて考察する。

一—一二世紀のイラクにおけるアラブ遊牧部族を取り扱った研究には、Diehl<sup>(1)</sup>によるマズヤド家などのアラブ遊牧部族がアラブのアミールとして重要な要員として活動し、イラクの政治的、経済的生活において重要な役割を果たしたとするものと、Madina<sup>(2)</sup>によるマズヤド家の拠点となるヒッラが開かれた年代決定とマズヤド家の起源に関する研究があるが、マズヤド家の軍事行動とカリフ、スルタンとの関係性を検討した研究は見られない。

## 一 バサースイーリーの乱でのマズヤド家の軍事的役割

本稿で対象とするマズヤド家は、イラク北西部を拠点とするアサド族に属するシア派のアラブ遊牧部族である。同家にはイラクの商業ルートや巡礼ルートの安全を確保するために、ブワイフ朝(九三二—一〇六二年)の大アミールよりヒマヤ(himaya, 保護権)が与えられていた。一〇五五年にセルジューク朝のトゥグリル・ベク Tughril Bek (在位一〇三八—一〇六三) がバグダードへ入城した後、イラク、ジャズイーラでは親ファアティマ朝(九〇九—一〇七一)のシア派勢力が活発化し、アッバース朝(七五〇—一二五八) カリフ＝カリーム al-Qa'im (在位一〇三一—一〇七五) からイラクを追われた反乱の首謀者バサースイーリー Basasi' (一〇六〇年没)<sup>(3)</sup> は、ファアティマ朝から財政的支援を得つつ、モースルを拠点とするアラブ遊牧部族のウカイル 'Uqayl 家、クーファ南方のヒーラ一帯を支配していたマズヤド家などのシア派遊牧部族勢力とイラク支配を策謀した。その後、マズヤド家などのアラブ遊牧諸部族は、トゥグリル・ベクの圧倒的な軍事力に脅威を感じて、彼の名前でのフトバ(金曜礼拝時の説教)を実行することによってトゥグリル・ベクへの支持を表明したり、バサースイーリーから資金や徴税権を伴う土地を授与されたりするなど、どちら側を支持するか態度を決め

かねていたが、一〇五九年三月バサースイーリーがバグダードで政権を樹立し、ファーティマ朝カリフムスタンシル Mustansir (在位一〇三八―九四) の名前のフトバと貨幣を発行すると、イラク在地の遊牧諸部族はバサースイーリーに帰順した。しかしバサースイーリーは同年一二月劣勢となりバグダードを去り、クーファに逃れるが、トゥグリル・ベクが派遣した軍隊に急襲され、バグダードに連行されて絞首刑に処された。そのため当時バサースイーリー側であったマズヤド家のドゥバイス一世 Duhayis I (一〇八二年没) はバティーハ (イラク低湿地帯) に帰還した<sup>4</sup>。このようにバサースイーリーの乱時の軍事的動向を見てみると、その時々々の情勢で諸勢力を天秤にかけてより優勢な側につくという日和見的な態度を示していたことがわかる。一方、バサースイーリーもトゥグリル・ベクも在地支配者のマズヤド家やウカイル家などの遊牧部族を味方に引き入れて利用することで、イラクでの軍事的支配を円滑に進めたかったのであろう。

## 二 スルタン位継承争いにおけるマズヤド家の役割

セルジューク朝においては、必ずしもスルタン位を継承するシステムが長子相続ではなかったために王族間で継承争い  
が起き、それが王朝の衰退につながったと言われている。イスラーム世界においては生前に後継者候補ワリー・アルアフド (wali al-ahd) を指名するシステムが存在し、それが実行されれば、滞りなくスルタン位継承が行われるはずであったが、それに異を唱える王族や兄弟がいたため、親族間の抗争に発展した。

### (一) マリク・シャール没後のスルタンとマズヤド家

一〇九二年同王朝において最大版図の支配を確立したスルタンマリク・シャールが死去すると、弟トゥトウシュ Tutush と息子バルキヤールク Barkiyarug (在位一〇九四―一〇一五) 間でスルタン位継承争いが起きた。一〇九三年当時マズヤ

道家のサダカ一世 Sayf al-Dawla Šadaga (一一〇八年没) はバルキヤールク側陣営についていた。<sup>7)</sup> 一〇九五年二月三月トルコ系遊牧部族出身のアミールユースフ・トルクマーニー Yūsuf b. Abūq al-Turkmanī がトゥトゥウシュによりバグダードにシフナ (shīna, 軍事総督) として派遣されたが、配下に治安悪化の元凶となることが予想される遊牧集団を引き連れていたことが原因でカリフに入城を許可されなかった。この時サダカ一世は彼らを防戦するためにバグダードへ進軍した。サダカ一世の到来を知ると、トルクマーニーはホラーサーン街道に撤退した。<sup>8)</sup> 翌年トゥトゥウシュはライ近郊の戦場で敗死し、バルキヤールク側が勝利した。<sup>9)</sup> 以上のように叔父・甥のスルタン位継承争いにおいて、サダカ一世はバルキヤールクに召喚されてバグダードに向かう。これはバルキヤールクにとって、カリフからスルタンとしての承認を得るためのバグダード行きは最重要案件であり、これに軍事的に周囲の遊牧部族の中でも最強のサダカ一世を自らの護衛につけるための作戦と推測される。さらに敵方のシフナが率いるトルクマーン軍団の乱入から街を防衛することも期待されていた。

一一〇〇年五月サフィードルードの戦いでバルキヤールクが大敗し、異母兄弟のムハンマド Muhammad (在位一一〇五—一八) が勝利した。この戦いでは、ヒツラのサーヒブ (総督) のサダカ一世と息子ドゥバイス二世 Nur al-Dawla Duhays b. Šadaga (一一三五年没) はバルキヤールク側で参戦していたが、その後ムハンマド側に寝返った。その理由はバルキヤールクのスズイル (宰相) のアアズズ・アルディヒスターニー al-A‘azz al-Dihstānī がサダカ一世に対して「スルタンの宝庫に属しているはずの金が、あなたの手元に一〇〇万デイナー以上ある。もしそれをスルタンに対して送金しなければ軍隊を派遣し没収する」と脅したため、ヒツラにおけるフトバでの統治者名をバルキヤールクからムハンマドに変更したのであった。その後バルキヤールクはサダカ一世に対して再三再四彼の許に赴くように使者を送ったが、これに応じなかった。ついにバルキヤールクは有力アミールのアヤーズ Ayyāz を使者として送り、バルキヤールクの許に参上すれば、欲する全てのを保証すると助言したが、サダカ一世が「バルキヤールクのスズイルを引き渡さない限り、貴殿の許には行かないし服従しない。もし彼を引き渡せば、私は貴殿の忠実な下僕となりましょう」と返答し、両者

は決裂した。その後サダカ一世はクーファに向かい、バルキヤールクのナーイブ（総督）を追放し、その地を併合した。<sup>(10)</sup>これは多額の金を要求してきたバルキヤールクに失望したとともに、サフィードルードの戦いでバルキヤールクが大敗し、ムハンマドが優位に立ったため、バルキヤールクを見限ったとも推測される。またバルキヤールクもマズヤド家の戦力が必要であったために、何度も交渉のために使者を送ったのである。

他方ムハンマド側は、サダカ一世を味方につけて軍事的基盤を強化し、バルキヤールクに対抗してイラク地域での勢力を拡大するために、サダカ一世のイクターを増加するという作戦に出た。サダカ一世はこれに乗じて支配地域を拡大していき、一一〇一年ジャーミアインの対岸にヒツラの町を建設し、マズヤド家の本拠地が確定した。<sup>(11)</sup>一一〇二・三年にはさらにヒートを取取る。ヒートは以前バルキヤールク配下の軍人のイクターであった。ここには従弟のサービト・イブン・カーミル *Thabit b. Kamil* を支配者として配置した。<sup>(12)</sup>

一一〇四年一月バルキヤールクとムハンマドの和約が締結し、フトバにより示される支配の範囲が確定した。<sup>(13)</sup>この時イラク（バグダードを除く）はムハンマドの名によるフトバの範囲に含まれ、サダカ一世の領域はムハンマドの支配下に置かれた。この和約ではサダカ一世についてはムハンマドの監督下にあることが明言されている。これはサダカ一世が遊牧部族を統率し一大勢力となる可能性を阻止しようとしたことの現われと推測される。

しかしサダカ一世は一一〇四年六月―七月にワースイトを、<sup>(14)</sup>一一〇六年にはバストラを支配下に置く。バストラでは一〇年間イスマイーール・ブン・アルスラーンジュク *Isma'il b. Arslanjug* の支配が続いていたが、彼が圧政を行っていたため、ムハンマドは彼を排除することを考えていた。そこでサダカ一世に対して「彼の追放に成功したらムクター（イクター保有者）に任命する」という条件を提示し、彼との戦闘を命じた。サダカ一世は勝利を治め、同年九月にサダカ一世は代理としてアルトゥーンターシユ *Altunash*（祖父ドゥバイス一世のマムルーク）を二二〇騎の騎馬兵とともに駐留させた。しかしサダカ一世の不在時にアラブ遊牧諸部族が同盟を結んで攻撃し、三二日間わたって略奪行為を働いた。サダカ一世

がその状況をきいて駆けつけた時には、遊牧民たちは立ち去った後であった。それが原因となりムハンマドはサダカ一世からバスラを取り上げ、シフナとアミード (‘amīd, 市政官) をバスラへ送った。<sup>17)</sup>すると一一〇六年一〇月にはサダカ一世がタクリートを奪取した。タクリートは、バグダードのシフナのアミール＝アークスンクル・ブルスキー Aqsunqur al-Bursuqi (一一二六年没) にムハンマドがイクターとして授与していた土地であったため、サダカ一世のタクリート支配の状況を知るとブルスキーは出撃した。タクリートのサーヒブ＝カイクバード・イブン・ハザラズブ Kayqubad b. Hazarasp はこの対立に困惑するが、結局サダカ一世に支援を頼み、タクリートはサダカ一世の支配下に入った。カイクバードはその後六〇歳で死去し、サダカ一世は同地における彼の代理としてクルドのワッラーム Abū al-Faḥ b. Warrām を任命した。カイクバードはバーティン派 (Batin)<sup>18)</sup> と関係していると噂されており、彼を庇護したサダカ一世もバーティン派ではないかという疑念にさらされた。<sup>19)</sup>さらに (イラクの) アミードのアブー・ジャアファル Abū Ja‘far が「サダカ一世の勢力や地位が大きくなり、高圧的である」と中傷し、さらに彼の支配下の住民がバーティン派に属していると異議を唱えた。

上記のような経緯があった後、サダカ一世がムハンマドの許から逃亡してきたサーヴェとアーヴェのサーヒブ＝アブー・ドゥラフ・スルハープ・イブン・カイホスロー Abū Dulaf Sulkhāb b. Kaykhusrū を保護し匿い、スルタンからの引渡し要求を拒否したことが両者の対立の始まりとなった。息子のドゥバイス二世はスルタンに金と馬、贈り物をして機嫌を取るようにサダカ一世に進言するが、軍団長のサイード・イブン・ハミード Sa‘īd b. Hamīd は武装抵抗を進言し、サダカ一世は後者の意見を採用した。この時カリフがサダカ一世にスルタンに降伏するよう使者を送ったが拒否されてしまった。一一〇八年サダカ一世は、冬の到来による雪解の泥濘に進軍を阻まれ小部隊で孤立したところを、ムハンマドによってヌウマーニーヤで殺害された。<sup>20)</sup>その後ムハンマドが、サダカ一世のイクターであったワースイトのマディーナをアークスンクル・ブルスキーにイクターとして授与し、<sup>21)</sup>マズヤド家の支配都市はヒッラのみとなった。サダカ一世の死後、息子

のドゥバイス二世は一時的に捕虜となったが、後にムハンマドに帰順し、イクターを授与された。

このようにムハンマドは、サダカ一世の領域拡大を承認することで野心を買い、スルタン位継承抗争時にバルキヤールクに対する防波堤としてサダカ一世の軍事力を利用したが、彼の勢力が予想以上に拡大したために脅威となり排除したのである。

## (二) スルタン・ムハンマド死後のスルタン位継承争い

一一一八年にムハンマドが死去すると、ドゥバイス二世はムハンマドの息子マフムード二世 Mahmūd II (在位一一一八—一二二〇) にヒッラへの帰還を願い、許可された。<sup>(22)</sup>翌年、マフムード二世と叔父サンジャル Saījar (在位一一一七—一一八) のスルタン位継承争い起きると、ドゥバイス二世はサンジャル側、ドゥバイス二世の兄弟マンスールはマフムード二世側で参戦した。同年サーヴェの戦いでサンジャルが勝利し、この勝利がバグダードに知らされ、サンジャルからドゥバイス二世がカリフ・ムスタルシド al-Mustashid (在位一一一八—一二三五) の許に派遣され、サンジャルの名でフトバの実施が要請され、マフムード二世の名前はフトバから削除された。<sup>(23)</sup>後継者となる息子がいなかったサンジャルは、マフムード二世と娘を結婚させて自らの婿とし後継者にすえたために、マフムード二世は事実上サンジャルの支配下に置かれ、ドゥバイス二世は実質的にマフムード二世の味方となった。

しかし、一一二〇年のマフムード二世と兄弟マスウード Mas'ūd (在位一一三四—一一五二) の戦いが起きた。この戦いの発端は実はドゥバイス二世にあった。ドゥバイス二世が密かにマスウードのアター・ベク (atā Bek, 後見人) のジューシユ・ベク Juyush Bek (一一二二—一三三三没) と連絡を取り合い、アター・ベクがマスウードに対してスルタン位獲得を急がせるように仕向けたからであった。ドゥバイス二世の目的は、マフムード二世とマスウードの間を不仲にさせて、マリク・シャーの息子のムハンマドとバルキヤールクがスルタン位継承争いに乗じて、彼の父サダカ一世が獲得した名声や高

い地位を得たように、自分も同様のことをしたいと目論んでいたからであった。この時ドゥバイス二世はマスウード側を支援したが、結局マスウードが敗退した。<sup>25)</sup>

翌一・二一年マフムード二世はドゥバイス二世との関係を修復した。それはトルクマーン出身のイールガーズイー Najm al-Dīn Ḥi-ghāzī b. Arṭuq (一・二二三年没) がドゥバイス二世の仲裁者として息子のティムールターシユ Husām al-Dīn Ṭimūrshāh (当時一七歳) をスルタンに送ったことが誘因となった。ドゥバイス二世はスルタンに恭順の印として金、馬などの支払いを提案し、ヒツラから毎日一〇〇〇デイナーと馬を保証した。<sup>26)</sup> 実は一・二一九・二〇年にドゥバイス二世はイールガーズイーの娘と結婚し、<sup>27)</sup> イールガーズイーの娘婿となったため、両者の関係上ドゥバイス二世が格下にあつた。

このようにドゥバイス二世は、ヒツラへの帰還を許可してくれたマフムード二世から、スルタン位継承位争いの勝者であるサンジャルへ、サンジャルから自分の地位と名誉の獲得が期待されるマスウードへ、そしてまたマフムード二世へと支持を変更し、常時自分の立場が有利に働くようにその都度支持を変えたのであった。その後のドゥバイス二世は、一・二二・四年のカリフムスタルシドとの戦い、<sup>28)</sup> 一・二二五年マフムード二世の弟トゥグリル二世 Ṭuġhrīl II (在位一・二三・三四) を巻き込んだカリフ軍との抗争<sup>29)</sup> を実行し、イラクでの支配領域の拡大を目論むが、結局一・三三・五年マスウード配下のアルメニア出身のグラームによって殺害された。<sup>30)</sup> 一・一六二年カリフムスタルシドがマズヤド家に対して軍を派遣し、彼らの拠点ヒツラから追い出し、マズヤド家の支配は終わりを告げた。<sup>31)</sup>

### 三 セルジューク朝の遊牧部族対策とマズヤド家の役割

セルジューク朝にとって領土内で移動し軍事力を持つ遊牧部族をどう扱うかは重要な問題であった。王朝創設時には同族のトルクマーンは領土拡大における重要な役割を果たしていたが、それがグラームに移行するに従い彼らの地位は低下した。しかし彼らは戦時には族長に率いられて、略奪品の分配を目的として戦争に参加する非正規軍として存在していた。セルジューク朝にはトルクマーン対策のためのシフナ職<sup>32)</sup>が存在した。このシフナは俸給としてトルクマーンから放牧地使用料を徴収していた。『書記階梯』におけるトルクマーンのシフナ職の任命状によると「遊牧部族内の治安を保ち、族長に彼らの放牧地であり、給水地でもある先祖伝来の地にいるように命じること、族長たちに属している戸数や人数に応じて牧草地と水を割り当てること、ハラージュ（地租）として、スルタンの厨室に年に二万四〇〇〇頭の羊を納めさせること」<sup>33)</sup>などが記されていた。Lambton や清水宏祐によると、トルクマーンのシフナ職の任命は自由に牧地を移動するトルクマーンをグラーム出身のアミールによって管理し、行動規制をする政策であったとする。さらにバグダードのシフナ職の出自を見ると興味深いことがわかる。トルクマーン出身者をシフナに任命することがあっても、アラブ遊牧部族出身のものを任命した事例は見られない<sup>35)</sup>。これはスルタンが同族のトルクマーンを信用しても、アラブ遊牧部族はどこか信頼ならないものと見做していたと推測できる。マズヤド家には確かに軍事力はあったが、宮廷において軍事的教練を受けたグラームではなかったためにシフナには任命されなかったのである。トルクマーン出身のシフナは、対トルクマーンとの交渉役の役割も期待されていたとも考えられる。トルコ系以外の遊牧部族への対応は、トゥグルル・ベクがアラブ系のハファージヤ家のマフムード・ブン・アルアフラム Mahmūd b. al-Akhrām にヒルア（名譽の外衣）を授与し、ハファージヤ家のアミールに復職させ、クーファとサキー・アルフラートのワリー（監督官）とし、スルタンの従者（Kawās）は

そこから毎年四〇〇〇ディーナールの徴税を請け負ったとあることから、遊牧部族の長をアミールとして任命し土地を与え、別個に徴税請負人を派遣するという方法で支配下に置いていたと見られる。

また、マズヤド家は他の遊牧部族からセルジューク家の領域を防衛する役割も担っていた。例えば一〇六三年にトゥゲリル・ベクが死去すると、カリフ側からウカイル家のシャラフ・アッダウラ Sharaf al-Dawla、ドゥバイス一世、クルドのハザーラスブ Hazaraso b. Bankir とワッラームの二人の息子等にバグダードへの召喚の手紙が届いた。するとシャラフ・アッダウラの息子イブラーヒーム Ibrahīm がアワーナへ向かい、彼の従者がアンバールを接収すると、配下の遊牧部族たちがその地域に広がり街道を封鎖してしまった。ドゥバイス一世はクルドやハフアージャ部族と協力してイブラーヒームと戦った。<sup>37)</sup>これは他部族と協力して、スルタン空位期間のバグダードの治安維持の役割を果たしたことを示している。

一一〇四・五年にサダカ一世はスルタンⅡムハンマドから、ハフアージャ家からの攻撃を防衛するように指示された。<sup>38)</sup>一一〇五・六年にハフアージャ家のあるグループが同じくアラブ遊牧部族ウバーダ家の男から二頭のラクダを盗んだことが原因で、両部族間で激しい戦いが起きた。ウバーダ家の男はラクダを返してくれるように頼んだが戻ってこなかったため、ハフアージャ家を急襲し一一頭のラクダを略奪したが、彼は捕らえられ、仲間の一人は殺害され、一人の手は切り落とされた。この事件が起きたのはマズヤド家の支配地ヒッラであった。ウバーダ家はこの状況を知ると復讐のために戦闘を準備し七〇〇騎を集結させた。ハフアージャ家は交渉して血の代償金による和平を申し出るが拒否されてしまい、サダカ一世が仲裁に入るが合意に至らなかった。結局クーファ近郊で戦いが起き、密かにサダカ一世が支援していたハフアージャ家が勝利した。<sup>39)</sup>その翌年に再び両部族間で戦いが起きるが、これはウバーダ家にとって前年の敗退への復讐を遂げるための戦いでもあった。実はこの戦いの発端はサダカ一世が、バティーハ近くにあるサダカ一世の土地との境界を、住民とトラブルを起こしていたハフアージャ家から守るために息子バドラーン Badran と軍隊を派遣したことが原因であった。さらにサダカ一世は、ハフアージャ家に恨みがあるウバーダ家を召喚し、夜襲をかけてハフアージャ家を敗退

に追い込んだ<sup>40</sup>。これはマズヤド家がスルタンから他のアラブ部族の侵略を防御する役割を任せられ、他の部族集団を調停する役割を果たしていた事例である。また他の部族をまとめる役割も果たしていた。例えば一一一八年にムハンマドが死去した際に、マズヤド家の拠点であるヒッラへの帰還を許可されたドゥバイス二世の許にはアラブ、クルド、その他の部族集団が集結したという<sup>41</sup>。当時イラクの遊牧部族間においてマズヤド家が他の遊牧部族を統制する存在であったことがうかがわれる。

### おわりに

以上一世紀後半から一二世紀初頭のマズヤド家アミールの軍事的役割について検討した。イラクにセルジューク朝スルタン王権が成立すると、彼らはスルタンに服属し、アミールに任命され、支配領域から貢納を強制される立場となったのであった。イラク在地権力者であるマズヤド家は、トゥグリル・ベクの主権を認めてフトバを実行することによって、旧来通りの支配が容認された。マリク・シャー時代には軍隊組織中に、常備軍であるグラーム軍の補助軍として既存勢力のマズヤド家のようなアラブ系、あるいはクルド系部隊が併存していた。マズヤド家に対して、同家の族長をアミールと認めて支配を承認することで同家支配下の土地からの貢納が見込まれたし、対外的にはシリア方面からの敵対勢力を迎え撃つイラク北方の防壁ともなったのである。このようにセルジューク朝はイラク周辺の遊牧部族の軍事力にも依存していた。彼らはグラーム出身のアミールとは異なり、元々祖先から継承された拠点となる領地を持ち、時には他の部族と敵味方になることがあっても深い繋がりを持っていた。スルタンの軍隊においてグラーム出身のアミールが大多数を占める中、マズヤド家に代表される既存の在地権力者（部族長）出身のアミールは少数派であったが、彼らのような在地権力者を重用し、既存の支配体制を組み込むことは広大な領域を治めるための便法のひとつであったと言える。

しかしマリク・シャー死後の継承争いの混乱により、次第にスルタンの求心力が衰えると、マズヤド家とスルタンとの関係は自らの支配領域の確保が最優先され、不服従の態度をみせることもあった。どのスルタンの元で軍事行動をするかは、その時々で情勢で変化し、この流動的な主従関係は支配体制を不安定にした。こうした状況下でイラク既存勢力のマズヤド家は一一世紀後半から一二世紀初頭のセルジューク朝支配下のイラク社会においてスルタンやカリフと深い関係を持ち、軍事的政治的に重要な役割を担っていたのであった。ここまで見てきたような軍事集団による支配システムがセルジューク朝のイラク支配を支える柱であったが、スルタン位継承争いによってその権威が失墜し、この軍事バランスが崩れると、セルジューク朝におけるイラク支配は終焉を迎えることになる。

#### 史料及び略号一覧

- A.K.: Muntajab al-Dīn Badī' al-Juwaynī (没年不詳), *ʿAtabat al-karaba* (『書記階梯』), ed. ʿAbbas Iqbal, Tehran, A.H.S.1329/1951.
- I.A.: Abū al-Ḥasan ʿAlī Ibn al-Aṭhīr (d.1234), *al-Kāmil fī al-tarīkh*, ed. C.J.Tombreg, 13 vols, Leiden, 1853, rep. Beirut, 1979-1982.
- M.Z. I: Shams al-Dīn Sibī b. al-Jawzī (d.1256), "Mir'āt al-zamān fī ta'rīkh al-ā'yān," ed. Ali Sevim, *Begeleler*, cilt. XIV, Sayı 18, 1989-1992, 1-260.
- M.Z. II: Shams al-Dīn Sibī b. al-Jawzī (d.1256), *Mir'āt al-zamān fī ta'rīkh al-ā'yān*, ed. Shams al-Dīn Abū al-Muzzaḥār Yūsuf b. Qizāughlā, 2 vols, Makkah, 1987.
- Husaynī: Šadr al-Dīn Abū al-Ḥasan, ʿAlī b. Nāsīr al-Ḥusaynī (没年不詳), *Zubdat al-tawārīkh: Akhbār al-umarā' wa al-mulūk al-Saljūqiya*, Beirut, 1985.
- Muntaẓam: Abū al-Faraj ʿAbd al-Rahmān Ibn al-Jawzī (d.1201), *al-Muṭazzam fī ta'rīkh al-mulūk wa al-umam*, vols. 5-10, Hyderabad, 1938-39.

註

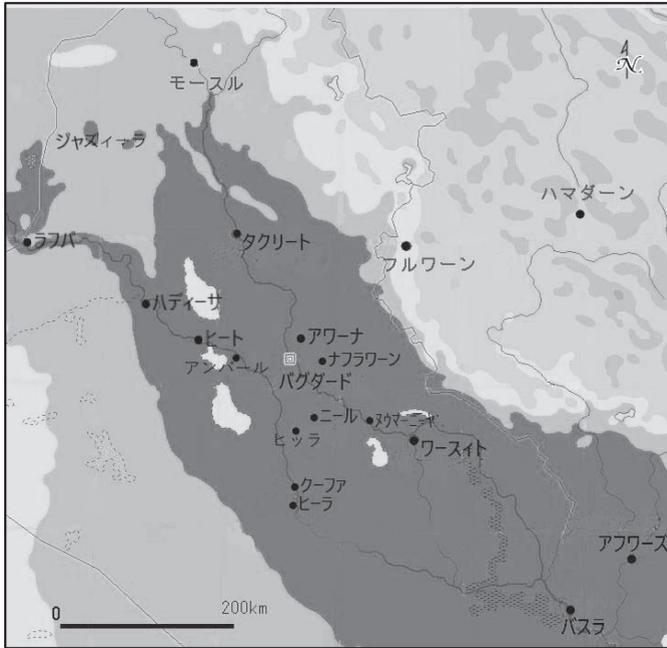
- (1) Khidr Jasnin Duri, *Society and economy of Iraq under the Seljuqs (1055 - 1160 A.D.) : With special reference to Baghdad* (University of Pennsylvania, Ph.D., 1970), 124-126.
- (2) G. Makdisi, "Notes on Hilla and the Mazyadis in medieval Islam", *History and politics in eleventh-century Baghdad*, Variorum, 1990 (初出: *Journal of the American Oriental Society* 74, 1954), 249-262.
- (3) フワイフ朝のバナー・アッダウラ Bahā' al-Dawla (在位九八九—一〇一二) のトルコ系マムルーク (I.A. IX, 650)。
- (4) M.Z. I, p. 62.
- (5) I.A. IX, 644-646.
- (6) I.A. IX, 650.
- (7) I.A. X, 226.
- (8) I.A. X, 244.
- (9) I.A. X, 245.
- (10) I.A. X, 308.
- (11) ユーフラテス河をはさんだジャーミアイン (二つの金曜モスク) の対岸に町が拡張・要塞化されヒッラと名付けられた。I.A. には元々祖先が遊牧テントで居住していたと  
 記述がある。
- (12) I.A. X, 351.
- (13) I.A. X, 358-359.

- (14) I.A. X, 369-370. 拙稿「セルジューク朝における王権の一考察」『人間文化創成科学論叢』一九(二〇一七)、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科を参照のこと。
- (15) I.A. X, 377.
- (16) I.A. X, 402-405.
- (17) I.A. X, 402-405, 411.
- (18) パーティン派はイスマール派の別称。セルジューク朝は有力者が暗殺されたため、この討伐に力を入れていた。サダカー一世はシーア派信奉者であったがパーティン派ではなかった。
- (19) I.A. X, 420.
- (20) Husaynī, 169-170; I.A. X, 448; M.Z. II, 497.
- (21) I.A. X, 444.
- (22) I.A. X, 533.
- (23) I.A. X, 551-552.
- (24) I.A. X, 548. 彼女は一一二二・三年に死去した (I.A. X, 605)。
- (25) I.A. X, 563.
- (26) I.A. X, 592.
- (27) I.A. X, 561; M.Z. II, 702.
- (28) I.A. X, 607-610; M.Z. II, 764-765.
- (29) I.A. X, 626-628.
- (30) I.A. XI, 30; Muntazam 17, 303.

- (31) I.A. XI, 296-297.
- (32) 佐藤明美「スルタン・サンジヤルのシェフナ達」『中央大学アジア史研究』二四(二〇〇〇)、二〇五―二二二頁を参照のこと。
- (33) A.K., 80-82; A.K.S. Lambton, *Landlord and peasant in Persia: A study of land tenure and land revenue administration*, London, 1953, 58-59 (岡崎正孝訳 五九―六〇頁)。
- (34) Lambton, "The internal structure of the Saljuq empire", *The Saljuq and Mongol periods* (The Cambridge history of Iran, v. 5), London, 1968, 245-246; 清水宏祐「セルジューク朝のスルタンたち」『スルタンの時代』、学生社、一九八六年、二二―二三頁。
- (35) ドゥバイス二世のナリーブ(副官)が一時的に任命された一例がある (I.A. X, 560)。
- (36) I.A. X, 12.
- (37) I.A. X, 27.
- (38) I.A. X, 396.
- (39) I.A. X, 400-402.
- (40) I.A. X, 421-422.
- (41) I.A. X, 533.

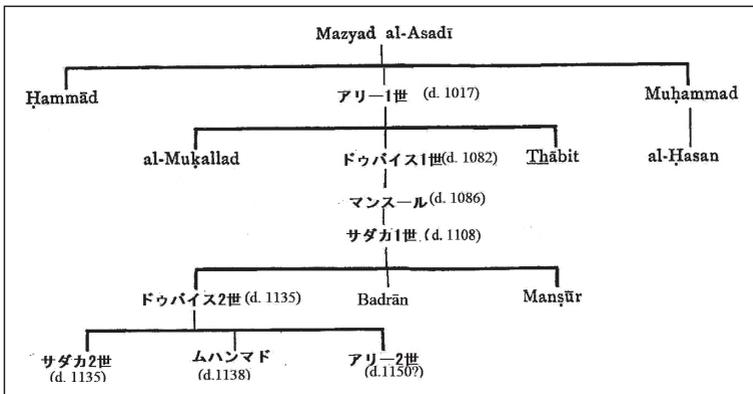
(お茶の水女子大学大学院博士後期課程在学)

【11—12世紀のイラク地形図】 ■は農耕可能な緑地帯



【マズヤド家系図】

※ Eduard Karl Max von Zambaur, Manuel de généalogie et de chronologie pour l'histoire de l'Islam, Osnabrück, 1976 を元に著者作成



【セルジューク朝系図】

